次の文章を読んで、後の問に答えよ。

「山言葉」と呼ばれる名前の一群がある。沖言葉などとともに忌み言葉として、里言葉に対するものである。すなわち、(1)山中では里での日常の言葉を使うことは禁忌とされ、特別の名前がつくられていた。そこでは、たとえば「米を草の実、味噌をつぶら、塩をかへなめ、焼飯をざわう、雑水をぞろ、天気の好きをたかがいい、風をそよ、雨も雪もそよがもふ」といわなければならなかった（『北越雪譜』）。名前が人間と或る事態（物事）との相互交渉のこもったものであり、固有の経験を刻みこまれているとすれば、それは発せられ用いられる固有の場をもつことになる。いいかえれば、特定の時空間の存在性格が特定の名前に込められているかぎり、その名前は他の場における存在とは衝突せざるをえない。こうして、時空間の移行と(イ)エッキョウに伴って、特定の事物は別の名前で呼ばれることになるのである。場に伴う複数の名前とその変更とは、人間が生きる世界が本来のっぺらぼうではなく、質的に多様なものであることを示している。そういうものとして名前は、事物の秩序と緊密に応答しあっていたのであった。

そのことは、民俗学が教える象徴的な事例、すなわち(2)特定の聖地を「ナシラズ」といい、また特定の神木を「ナナシノキ」と呼ぶ習俗の存在によっても裏書きされるだろう。これはむろん神聖な場や物に対する人々の畏怖が、日常的な名前の世界からの敬遠と(ロ)シャダンを強いたのであるが、同時にそこには、空間や事物の存在のありかたを決定づけ、それを経験世界へと占有せずにおかない名前の威力が表明されている。名づけることは、「所有する」ことであったからである。

名前が(ハ)ナイゾウするこのような固有性を、もっとも顕らかに示すのが神話的世界である。そこでは固有名詞が最大限の威力を発揮している。神話的思考は世界を、固有名詞を貼りつけた事物の総和として捉えるのであって、したがって、名前を付けられた物と物との間はいわば切れていると考えられる。つまり、それぞれが固有性に深々と貫かれることによって、神話的空間は「つぎはぎの空間」とならざるをえないのである。そこでたとえば、都とすべき地を求める王の(ニ)ヘンレキが試煉の空

間を通過しなければならないとすれば、その場所は隈（クマ）（奥地）、つまり熊が出て来ても不思議ではないような不毛の地でなければならない。すなわち「熊野」という名をもつ地でなければならない。そうして、そのクマクマシき土地での受難と復活をへて到り着くべき場所は、当然めでたき地であり、すなわち「よき人のよしとよく見てよしと言ひし」と謳歌される「吉野」でなければならないのである。したがって、「熊野」と「吉野」との「つぎはぎ」の関係は、もっぱら名前が担う意味連関において支えられている。現実の地理的関係ではなく、願望の地政学とでもいうべきものが、(3)それを統合しているのである。ある空間や場がもつ意味や性格と、そこに込められた人々の願望とは、名前のうちにすべてが要約されていた。

この固有性の強さの故にまた、名前は人々の想像力を刺激し動かして、物語の発生を促さずにおかない。そこから周知のヤマトタケルの物語のような名前説話の傑作が生みだされることになる。「ヤマト」という政治象徴的な意味と「タケル」という荒々しい叛（はん）逆性とを同時に担うその名前の内に、この英雄物語の悲劇的展開を決定づける動因がひそんでいた。(4)まさしく名前が背負う「物」が語りだすのである。そして、このような物語の産出は、すでに指摘されているように、特定の場所や事物の名前の意味が曖昧になったとき、それを不透明の状態から救出しようとするときに、最大の動機づけを得るのであった。こうして、夥（おびただ）しい地名起源説話や民間語源説話という形での物語的な意味産出が企てられる。(ホ)ショヨの環境を、改めて生きた固有名詞によって埋めつくすことによって、自分たちの生活空間として創造しなおすのである。

（市村弘正『「名づけ」の精神史』）

問一　傍線部(イ)〜(ホ)のカタカナを漢字に改めよ。

問二　傍線部(1)「山中では里での日常の言葉を使うことは禁忌とされ、特別の名前がつくられていた」とあるが、このように「忌み言葉」が使われるようになった経緯を九十字以内で説明せよ。